

育児と仕事

# 女性医師 両立を模索

出産や夫の転勤を機に、医療現場から離れた女性医師が復職できるよう勤務を配慮したり、相談にのったり。女性医師が増える中、育児と仕事の両立を支援する取り組みが、中国地方でも始まっている。岡山大学では、個別の事情に応じた制度が効果を上げている。

## 希望に沿う勤務体系



岡山の取り組みは、名づけて「MUSCAT」プロジェクト。「医療人のためのチームワークによる団結・サポートとキャリア構築の取り組み」の英語表記の頭文字をとり、地元名産のブドウ品種とかけ



MUSCATで打ち合わせをする片岡仁美センター長（右）、川畑智子副センター長（左）ら＝岡山市北区

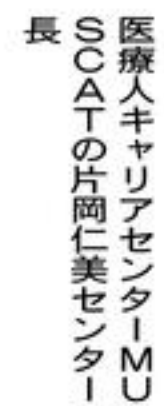
た。前身の制度の運用が始まったのは2008年度。取り組みの中核を担うのが、岡山大学病院に設けられた「キャリア支援枠」だ。勤務先の診療科と相談のうえ、本人の希望に沿い、勤務時間の長さや休日勤

## 病児保育利用で負担軽減

「医療人キャリアセンターMUSCAT」のセンター長で医師の片岡仁美さん（42）が心がけているのは、「見た目の条件は同じでも、一人ひとり事情は違う」ということだとい



う。片岡さんは以前、子育て中の女性医師Aさんが、「同じ年の子どもがいるBさんにもできるんじゃないかな」という言葉を聞いたことがきっかけで、病児保育の取り組みを始めた。09年には大学病院



医療人キャリアセンターMUSCATの片岡仁美センター長

務、平日夜間の当直勤務の有無を調整できる「完全オーダーメイド」をうたう。この制度を利用して復職した女性医師は今春、累計100人に到達した。現在は男女問わず、出産・育児、介護などで常勤勤務ができない医師を対象にしている。

「上司に言われたこと耳にした。Bさんはいざという時近くに住む母に子どもを預けることができるが、Aさんの母は遠方に住んでいて無理。そうした事情は表面的な情報だけではわからないんです」

支援は復職に至る過程だけにとどまらない。復職した子育て中の女性医師が越えなければならぬハードルの一つが、子どもが病気になる場合の対応。そのハードルを少しでも低くしようと、09年には大学病院内に「まずかっ」と病児保育ルーム」を設けた。病児保育室づくりを担った医師の川畑智子さん（42）は、自身も子育てのためにいったん退職し、前身の制度を使って復職。今は、医療人キャリアセンター副センター長を務める。「病児保育室があることでかえってお母さんを追い込み、子どもが重い病気で仕事を休みにくくなるようなことがあってはならない」というのが川畑さんの信条だ。子どもの症状によっては、病児保育の基準では受け入れられないと伝え、看病のために仕事を休める制度についても説明するようにしているという。こうした取り組みが功を奏し、岡山大学病院で勤務する全医師に占める女性医師の比率は、制度開始前の07年は18%だったが、12年には26%まで上がった。06年まではゼロだった育児休業を取得する医師の数も、近年は年間7〜10人と増えてきている。「フルに働き続けるか、さもなくば退職か。二者択

増える女性医師 厚生労働省のデータから算出すると、中国地方5県の全医師に占める女性医師の割合は、2012年に18%。10年前の02年の14%から4割増えている。年齢別では、30歳代は19%から28%に。20歳代は30%から34%と、この10年で増加。若い世代ほど、女性医師の割合は高い傾向にある。98〜04年には、医師免許を持つ女性が、医師として就業している比率が、36歳前後で8割を下回っていたという研究データもある。医療現場の人手不足が深刻なだけに、復職支援のさらなる広がりが期待される。

一だった大病院の風土は確実に変わってきている。マイノリティーでなくなると思われる3割超えまで、あと一歩です」。片岡さんはそう力を込める。

## 他県でも支援策

両立支援策は、他の県にもある。山口県医師会は、出産・育児と仕事の両立をめざす女性医師向けに、専任の保育相談員を置く。保育所への送迎や家事代行など、個々の医師のニーズに合わせて「保育サポーター」をあっせんする。

広島県では、県地域医療支援センターが運営するウェブサイトを「ふるさとドクターネット広島」を通じて、女性医師同士が出産・育児や働き方等について質問や悩み相談ができるネットワークづくりを進めている。



記者より

病児保育が普及すると、かえって子どもが病気で仕事を休めなくなる。病児保育室の普及が進む山口県宇部市の取材をしていた時、そんな反対意見もあると耳にしました。岡山大学病院の病児保育室の運営方針を聞き、そんな病児保育の是非を巡るもやもやが一挙に晴れたように感じました。（大野博）